（様式２－１）

（研究課題を記入する）

日本における「場所(place)」の形成原理に関する基礎研究

平成 9 年度共同研究費研究成果報告書

平成 10 年 6 月

研究代表者 山下 泉

（所属 多摩美術大学 美術学部）

（B5）

（様式３）

平成 9 年度共同研究費研究経過報告書

1．研究期間　~~昭和~~ 平成 8 年度～平成 10 年度

2．研究課題　日本における「場所(Place)」の形成原理に関する基礎研究

3．研究分担者

研究分担者名	所属	職名
山下　泉	多摩美術大学　美術学部　環境デザイン学科	教授
清田　義英	多摩美術大学　美術学部　共通学科	教授
田淵　諭	多摩美術大学　美術学部　環境デザイン学科	助教授
水野　義紀	東和大学　工学部　建設工学科	助教授
岸本　章	多摩美術大学　美術学部　環境デザイン学科	専任講師
松澤　穆	多摩美術大学　美術学部　環境デザイン学科	専任講師

4．研究経費

~~昭和~~ 平成	年度	千円
~~昭和~~ 平成	8 年度	900 千円
平成	9 年度	900 千円
計		1,800 千円

5．研究経過

第1年目に、基礎資料の収集・基礎学習を行い、まだ不十分ではあるが「場所」の候補地を先ず一箇所選出し、（福島県桧枝岐村）現地へ出向き、基本的調査を行なった。（第2年目である昨年には）
ここは江戸時代から、農村歌舞伎をはじめ、神社を中腹にまつる山の下に常設の舞台を建設し、山の斜面を観客席、平場を平土間として、屋外の劇場として真に珍らしい一体感を創出する「場所」と呼ぶにふさわしいところである。ここの実測調査を行い、その地形的特質を把握しようとした。
第3年次で、第1期の最終年度となる今年は、海又は湖の近くの「場所」を選出して、ひとつの成果をまとめたいと思っている。

6．研究成果報告書として取りまとめられない理由

三年計画で着手し、二年を経過したところで、まだ資料を収集する段階であるため、まだ成果のまとめはできない。
来年（平成11年）には　ある程度のとりまとめをして、研究紀要へ発表したい。

7．研究成果の取りまとめ時期（予定）　平成 11 年 3 月頃

“場所”の様態

山下　泉
清田義英
田淵　諭
岸本　章
永野義紀
松澤　穣

Three modes of *“the place”*
Izumi Yamashita, Yoshihide Seita, Satoshi Tabuchi, Akira Kishimoto, Yoshinori Nagano, Mamoru Matsuzawa.

This is a report of “*the Place*”.

“*The Place*” is a word which is originated from “genius loci” namely “the Genius of the Place”.

We surveyed the modes of three kinds on “*the Place*”-at a sacred ground (Okinawa), in the historic ground (Katase) and in living ground from the past (Hinoemata). Through the concrete survey of three modes, this report is described that “*The Place*” is made into the complex form to which man made and fitted the geographical features in human-life-“*the Place*” is the carved stamp of human.

1. はじめに ― “場所”について

私たちはこの地球上の空間に生き，生活しているのであるが，空間という漠然とした一般的な呼び方からは具体的なイメージは浮かんでこない．単に空間といえば，どこまでも無限定の涯しない広がりである．砂漠も，草原も，海原も，山並みも，林立するビル街も空間である．こうした格別な特徴のない，均一な連なりのなかで，私たちがどことなく落着いて佇み，安心感をもって横になり，気さくに集い，話がはずむ．また，清々しい気持になったり，厳かな気分になったりといった所がある．そして，そのような“場所”に私たちの祖先は家を建てて住みつき，大地に幾分なりとも手を加えて生活に合わせてきた．

このように無限に広がった空間のなかから，私たちの気持に馴染む所を選びだし，周囲の他から区分し，そこに手を加えてさらに自分たち人間の側へ空間を引き寄せ，目的にふさわしく設(しつら)える．こうしていわば周辺環境を「地」とする，「図」としての“場所”がつくられていく．

現在の日本でこのような意味をこめて用いられている，この“場所”ということばは英語の“Place”を単純に和訳したものである．“Place”なる概念は，アメリカのC.O.サウァーを中心としたバークレー学派（地理学）によって1960年代に育まれ，日本の地理学分野には紹介されていた模様である[1]が，日本で一般的にひろく知られるようになったのは，カリフォルニア大学バークレイ校で博士号を取得したイー・フー・トゥアンの『空間の経験』（原著は1979年刊）が1988年に翻訳出版され[2]，次いでエドワード・レルフの『場所の現象学[3]』が翻訳（1991）されて以降のことであろう．その後，彼等の著作は次々と翻訳紹介されている．

他方，建築の分野においては，ひとり早くからノルウェーの評論家C・ノルベルグ＝シュルツがハイデッガーの実存主義に依りながらラテン語の“ゲニウス・ロキ（Genius Loci）”なることばを用いて“場所”の概念を説いてきた．彼の考えは大著『ゲニウス・ロキ ― 建築の現象学をめざして』（1979年）としてまとめられ，日本では遅れて1994年にやっと刊行された[4]．イギリスでは18世紀から19世紀初頭にかけてのいわゆる英国式風景庭園において，ゲニウス・ロキの概念が用いられていた[5]．イギリス建築史を専攻とする鈴木博之はこの“ゲニウス・ロキ”（英訳するとthe Gemius of the Place又はthe Spirit of the Place）を“土地神”とか“地霊”といったことばにおきかえて紹介し，日本に即して語った[6]．

日本でのこうした動きは，ポスト・モダンの時期に重なっており，ということはモダンが空間を均一化したということへの反省の時期であって，意味ある空間＝場所への復権をめざすための根拠として“場所”の概念がとりあげられたのではあるが，ある範囲にまで浸透はしたものの，ポスト・モダンが単なるスタイルの流行で終ったように，建築界での大きな趨勢とはならなかった．

土地神の存在については，日本では原初の記録として常陸國風土記の行方郡の項に，新たに開墾して新田をひらこうとした際のこととして，次のように述べられている．

「箭括の氏の麻多智，郡より西の谷の葦原を截ひ，墾闢きて新に田に治りき．此の時，夜刀の神，相群れ引率て，悉盡に到来たり，左右に防障へて，耕佃らしむることなし．俗いはく，蛇を謂ひて夜刀の神と爲す．(中略)是に，麻多智，大きに怒りの情を起こし，甲鎧を着被けて，自身杖を執り，打殺し駈逐らひき．乃ち，山口に至り，標の梲を堺の堀に置て，夜刀の神に告げていひしく，『此より上は神の地と爲すことを聽さむ．此より下は人の田と作すべし．今から後，吾，神の祝と爲りて，永代に敬ひ祭らむ．冀はくは，な祟りそ，な恨みそ』といひて，社を設けて，初めて祭りき」(7)

ここでは，当初の水田がつくられていたのは，川が平地に至って流れがゆるやかになり，水に運ばれた土砂が堆積された沃土の地帯であった時代から，さらに谷戸部へ遡って開墾して水田をひろげていく時期のできごととして読むことができ，人間が自然を手の内にとりこもうとする過程で，そこの土地神＝夜刀の神が蛇の姿となってあらわれ，その神を人間が山の登り口まで追い払い，そこまでを人間の領域として獲得し，神の領域と人間の領域の境界を定めたうえで，神を祭ることを約する，という極めて人為的な神祭りのいきさつを記している．神は人間を守ってくれるものではなく人間に祟るものであり，祟りを鎮めるために祭る，という性格があらわれている．自然と人間との闘いがあると同時に両者の妥協の経緯でもあり，その点があからさまに記されている．だがともかく，土地神が存在していてその土地を支配し，そこに性格を与えている，との観念があったという点にここでは着目しよう．要するに，その土地のあらわす意味を，そこが人間にとって実利(米作)をもたらす有用な所であると読みとって解釈したのである．

それぞれに性格のある土地を，そこを支配する土地神の力によるとみなすことでそれぞれの差異を説明してきたのであった．その差異の意味を解釈することで，私たちの父祖は大地と馴染み，そのなかで目的に適う特性のもつ所を，さらに手を加えることで一層適合性を高めて，いわば自然を人間化し，人間生活に不可欠な空間に変え，生活を成り立たせてきた．このようにつくられ，人間の刻印を示して周域から区別されたまとまった空間を，“場所”とここではとらえておく．精細な定義づけは，さらなる調査を経た後に行うこととして，ゆるやかな“場所”概念をもとに，さまざまな現象をみることとする．

ゆるやかに“場所”としたのであるが，これは町全体をとらえることもできれば，町のなかの広場をいうこともできるし，ある辻の一画をさすこともできる．面積にしてみれば大きな差があるのだが，以下にみるのは，町や村の一部分で，ある限定された一画をなし，かといって一個人が私的にのみ認知できる場所ではなく，ひとびとが寄る公共的・普遍的な場所をとりあげることとする．

私たちの身のまわりには，もちろん多くの“場所”は存在していたし，今も残っている筈であるし，それらを私たちは現在どのように感じ，どのように利用しているのだろうか．恐らく，古来の“場所”は経済高度成長期に多くは破壊され，幸いに残っていてもそこのもつ意味の濃密さや凝縮性は希薄になっているのではないだろうか，という悲観的な見通しがあり，そして濃密な“場所”を現代につくっていくためにも，“場所”はどのように成り立っているのかを分析して，地形や地勢に潜在する力を人がどのように引きだし，それを補強するためにどのように手を加えていったかを追求しようとしたのが，本研究の端緒であった．

“場所”とみなされる所のなかでも，私たちが対象としたのは，個人的なものは除外して，公共的・普遍的な多くの人びとが利用でき，また多くの人びとが“場所”として認識できているところ，そしてそこの共同体以外の，例えば隣村や旅行中の者などでも“場所”と感じられるところに限定した．従って面積的(空間的な広がり)には，一つの町全域ということではなく，町なり村なりの一区分程度の領域に限った．

方法としては，現存するものについては，先ずその“場所”を見，体験した上で，写真と実測によって，印象だけでなく物理的に確定してとらえておくことを心がけた．体験による知覚認識はきわめて大切で，それを基盤として人びとがそこを“場所”と認知しうるのであるから，私たち調査者の感覚をもとにして，この感覚が生じるのは何故かをとらえるための背景要素として実測という物理的データを用意したのである．裏を返せば，物理的にはたいしたことはなくとも，総合的な巧みな環境演出を施せば，極度な感興をつくりだすことができるからであり，その演出方法を探ることが本研究の真の目標であるが，今回は性格の異なる三つの“場所”の様態(ありかた，現象)を調査し，報告する．

2．自然の“場所”── 聖なる場所

自然の地形そのものが，日常的経験を隔絶した，おどろおどろしい空間をつくりだしているのに遭遇したとき，強い畏怖の念にとらわれることがある．文明の痕跡にまみれた現代の環境においてすら，まだかすかながら残されているのだから，古代の人びとがゲニウス・ロキ，すなわち土地神とか地霊とかがそこに存在して，そのものの力の発現によるものと思いなしたのも無理はない．そしてそこが人間へ訴える力が強ければ強いほど，強大な神の力を感じたであろう．とすれば，そここそ神を崇める“場所”に特定し，聖地として，格別の心遣いをもって，穢れを排除し，清浄につとめたであろう．旧約聖書にも記されている．モーセが羊を飼ってホレブ山へ来たとき，しばが炎を

図❷－1　斎場御嶽の位置，久高島が東の海上に浮かぶ．（国土地理院『那覇』平成9年8月発行）

あげているのに焼けていないので見定めようとすると，「此に近よるなかれ　汝の足より履を脱ぐべし　汝が立つ處は聖き地なればなり」[1]と神の声があり，エジプトからイスラエルの人びとを連れ出す使命をモーセに与えるのだが，聖き地では履物を脱ぐことを求められている．

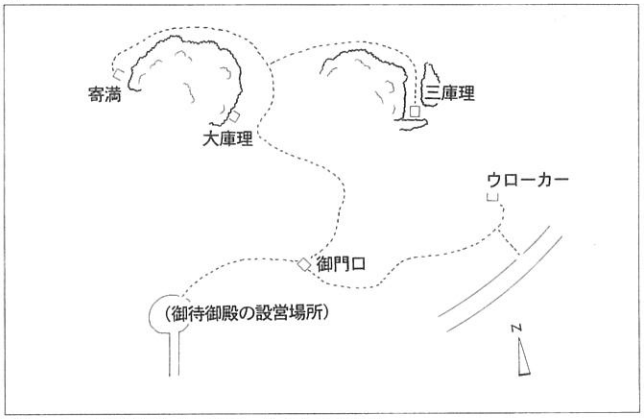
自然の土地を一見しただけで，そこに畏怖すべき有様を見出したとき，人はまず神を感ずるであろう．神のなす技 ── 人間には成し得ない神秘の力を．神を読みとった“場所”を人びとは聖地として崇め，みだりに手を加えることをせず，また所によっては限られた者のみしか立入ることのできない“場所”として尊び，代々まもりつづけてきた．O・F・ボルノウによれば，共同体が他の宗教に帰依しても，たとえば布教してきたキリスト教に宗旨がえして新たに教会を建てる場合でも，その敷地は従前の神殿の旧址であるといわれる[2]．つまり，いつまでも聖地は不変に同じ“場所”なのである．

このような聖地も，近代の日本では度々の危機にみまわれ，ないがしろにされた．まずは明治期の廃仏毀釈と神社合祀による．次には第二次大戦後の復興期における乱伐による環境破壊であり，最後のだめ押しが経済高度成長期以降の乱開発と観光化であり，等閑・放置はまだ良いほうであった．この結果，日本各地における聖地も，神々しさは失われ，霊気に満ちた聖なる雰囲気は薄れるばかりとなっている．

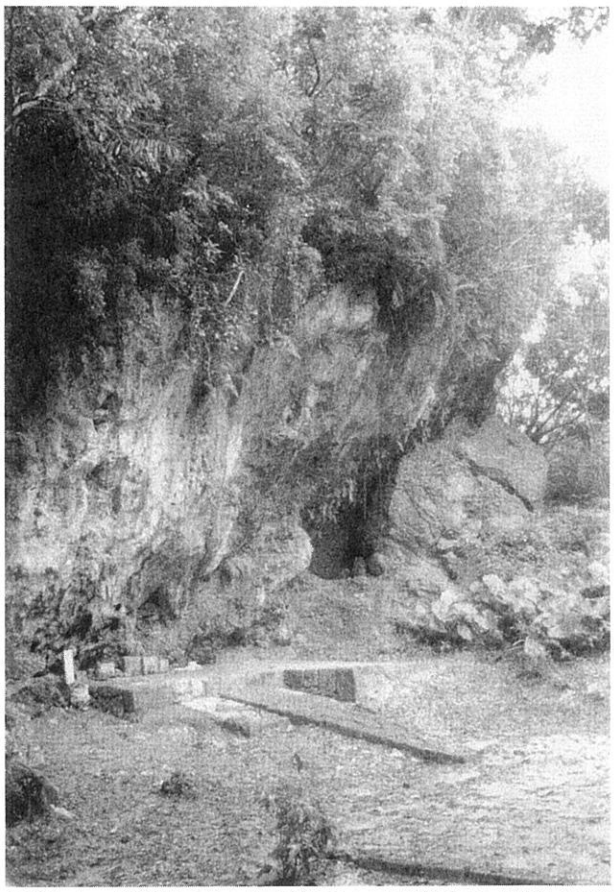
こうした現状のなかでも，人びとの信仰心が篤くまだ比較的に聖なる感じを留めている沖縄の斎場御嶽をとりあげることとする．

斎場御嶽（「せいふぁーうたき」と呼ばれる）は，沖縄本島の南東部の知念半島に位地し（図❷－1），沖縄では最も聖なる霊地とされている．それは最も高貴なる神職である聞得大君（女性）が参る聖地であり，男子禁制であった．おおよその配置を図❷－2で示すが，その最奥部が三庫理（サンダーイ）という最も聖性の高い“場所”である．

一般に沖縄での祭りは，聖所をいくつか巡行し，ページェントの経過において聖なる感興を盛りあげていくようであるが[3]，ここでの儀式も，他の御嶽その他数カ所を経て辿りついて最後のクライマックスとなる．そしてここだけでも小さな拝所を5カ所巡ったのちに最奥の三庫理へたどりつく構成になっている．前段の小なる拝所も，最奥部ほどではないが，写真❷－1，写真❷－2に示すように地形上の特異性が認められる．崖状の垂直面の下部が抉られたような凹みをなし，小さな洞状を呈し，寄満（ユインチ）と三庫理にはその前部に鍾乳石が垂れ下がり，現在でもその先端から液が滴り落ちており，神さびた雰囲気を醸しだしている．この一帯は現状でもかなり木が繁って昼なお暗いのであるが，第二次大戦時のアメリカ鑑船からの鑑砲射撃による破壊と，戦後に樹々を伐りだして出荷したために，かつての樹木の繁茂状態はみるかげもないという[4]．沖縄の樹木は，内地では観葉植物として鉢植えにされているガジュマルやヤブニッケイが多く，葉が繁って，高さよりも横に枝をのばして絡みあい，天を覆っている．従って現在でも陰々滅々として暗くじっとり湿っており，もの怖しさをおぼえるのだが，この状態からかつての人の手に触れずに保たれていた頃の杜の状態を想像するに，さらに鬱蒼と茂り古木の根が地を這ってのたくり被うさまは，肌に粟粒が立つほどに畏怖の念にかられるに違いない．こうした樹々のなかを歩いて自然のつくった奇岩の地点（拝所）を巡って最奥部をめざすと，左に樹々が繁り，右に立上る崖

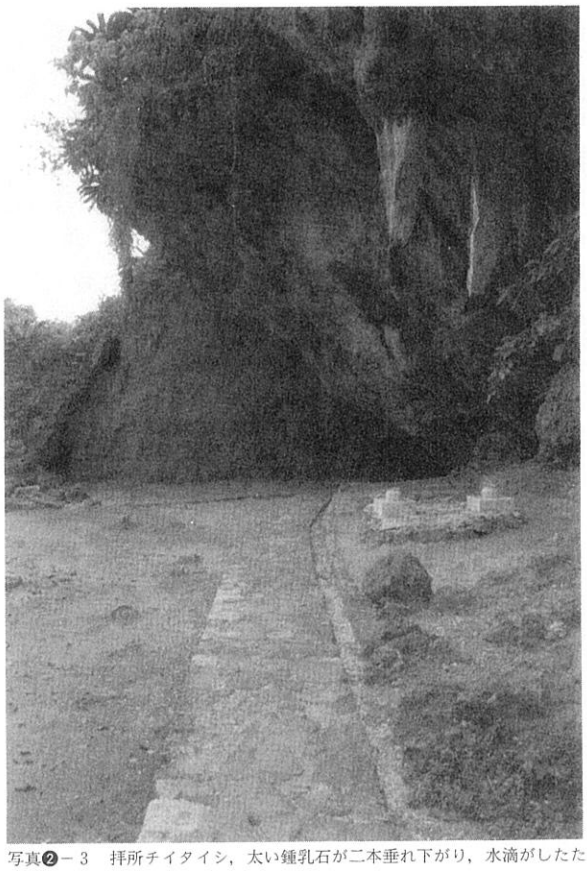


図❷－2　斎場御嶽全体の配置・構成を示す略図．

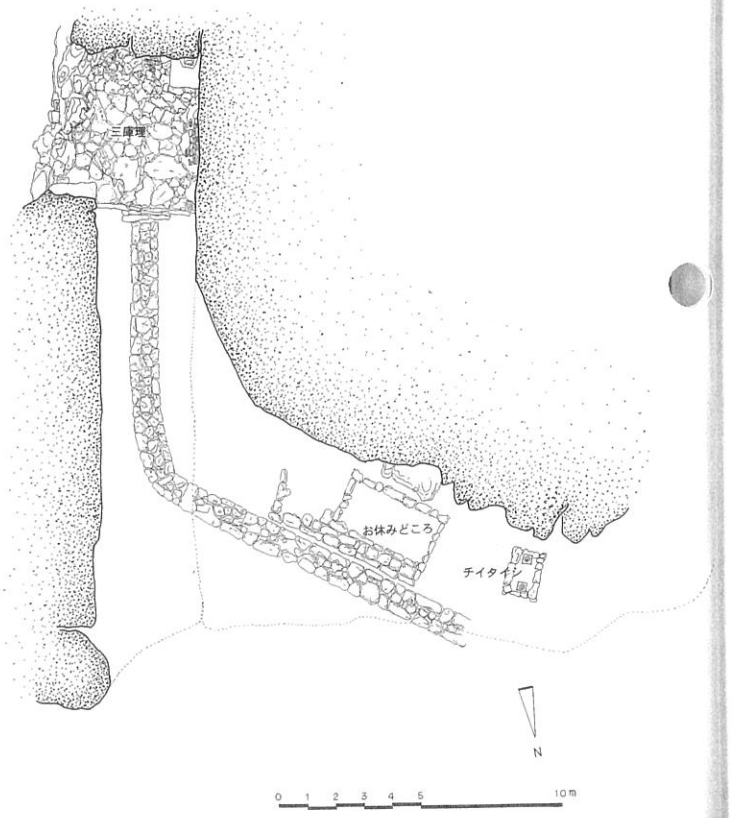


写真❷－1　大庫理(ウフグーイ)．巨岩のえぐれた下部にある．(撮影：山下泉)

写真❷－2　寄満(ユインチ)．巨岩の大きくえぐれた下部で，鍾乳石が一本垂れ下がる．(撮影：山下泉)



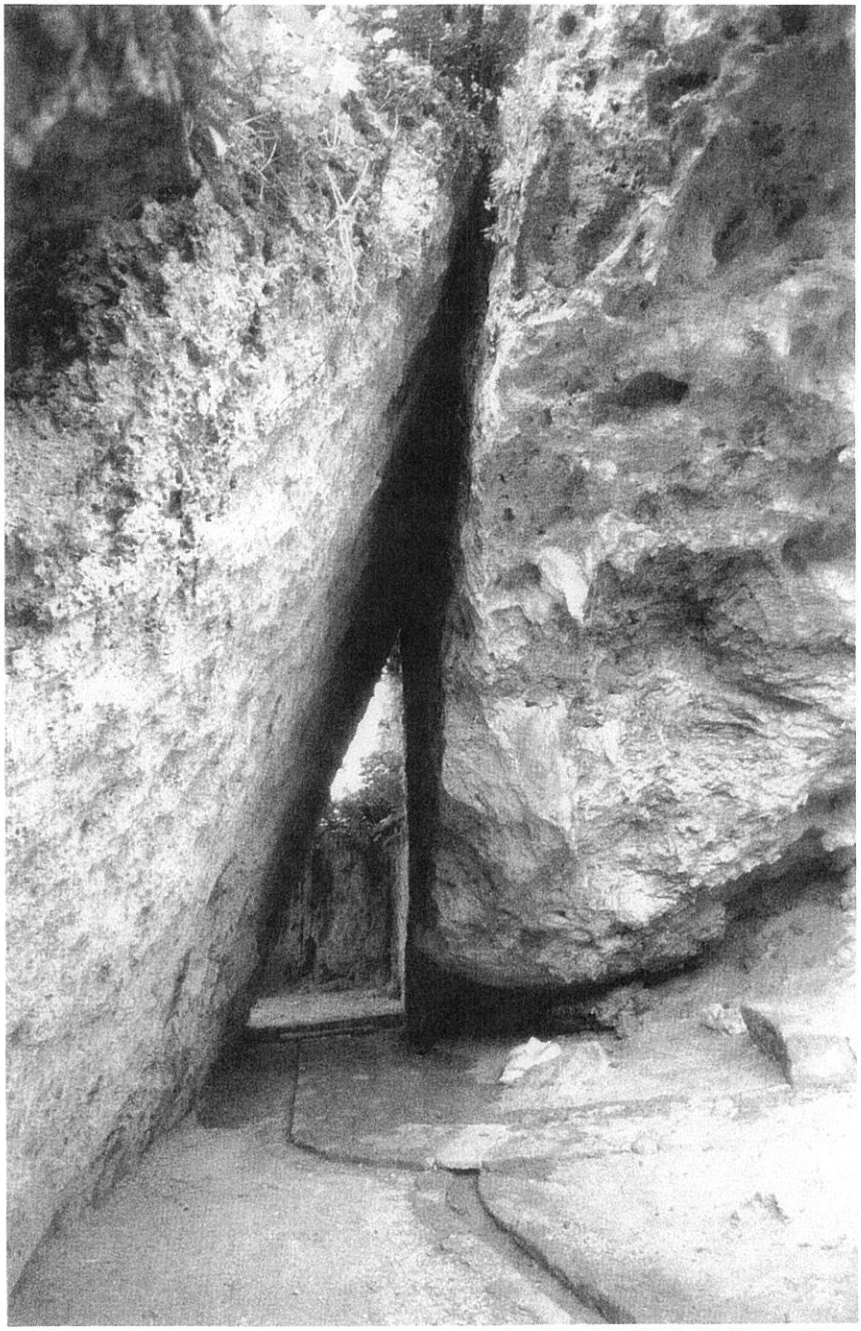
写真❷－3　拝所チイタイシ，太い鍾乳石が二本垂れ下がり，水滴がしたたり落ち，受ける壷が据えられて，吉兆の占いに用いられた．頭上に大きく岩が覆いかぶさる．突き当った右手に透き間がある．(撮影：山下泉)



図❷－3　三庫理廻り平面図．お休みどころ，チイタイシの拝所などが配される．かつては男子禁制．(『知念村歴史めぐり』知念村作製p. 9所収の図を参照して作図)(作図：山下泉)

に沿って進むこととなり，この右の崖の下部が抉れてまた鍾乳石の垂れ下がりが2本あらわれ，その下に拝所(チイタイシ)が築かれ，鍾乳石から漏る水滴をうける壺が置かれる(写真❷－3)．その拝所と左部のお休み所の壇のある下部の凹みの上へ，左から大きく倒れかかるように壁が斜めに押し寄せて覆いかぶさっている．その下を右へ潜(くぐ)った向こうが最奥の三庫理なのだが，ここへはチイタイシをすぎて右へ曲がることになる．この時点でこれまで右手に沿ってきた崖面が左右に切れ，その側面に巨大な平らな岩石が斜めに寄りかかって，その下部につくられた鋭い三角の洞門状の透き間に直面することとなる(写真❷－4，図❷－3)．この意外さと，この地形がつくりだすおどろおどろしさには，心胆が奪われる気持がする．感覚の鋭敏な人はトランス状態に没入してしまうといわれる[5]のも当然と思われる．

神事の際には敏感な巫女のみがここまで来ることができ，恐らくこうした神がかった状態で三角形の暗い透き間を潜って，暗がりの向こうに陽の当る明るい三庫理に突きあたる．ここは三方が岩状の岩壁に囲まれ，左手つまり東が開けて樹々の葉の切れ目に海がひらけ，そこには久高島(くだかしま)が浮んでみえる．この久高島こそ沖縄の創世神話において，神が初めて上陸した地点であり，最も神聖な島とされ，今なお聖島としてさまざまな不思議が言い伝えられ，また現地の人びとから信じられている島で



写真❷－4　巨岩が寄りかかる透き間をくぐった向うが三庫理．左方(東)に海上に浮く久高島を臨む．(撮影：山下泉)

ある．三庫理に至って，先ず天空を拝し，次いで太陽が東方海上に登り，キラキラと黄金色に照り輝く海面につつまれた島影が深々と黒く抜けて浮び，太陽の穴といわれる厳かな久高島を拝する……これが祭儀であった(古史料には久高島遥拝所の記録はなく，近年になって岩がすべり落ちて東がひらけてからのことと推察され[6]，かつてはこの全体の岩の山上から遥拝していたともいわれている)．

斎場御嶽が沖縄最高の聖地とされるのは，国王を宗教的な面から援け，国王に次ぐ位をもつ聞得大君が，自分の領地に初めて入り(御殿(うどぅん)入り)，そこの祝女(ノロ)によって新たに神号を奉られる即位式(御新下(おあらお)り)が執行され，これが琉球国最大の儀礼ともいえる[7]からであった．

沖縄ではオナリ神信仰が一般的であって，これは女性のほうが神に接しやすく，また神の力を導きもたらす能力があると考えられ，兄弟姉妹の関係において，姉妹である「オナリ」が兄弟に対して，護り，神の恵みをもたらす霊力をもつと信じられ，宗教的には女性のほうが男性より優位にあった．従って『沖縄の集落には，神々の天降りする聖なる杜(もり)があり，「ウタキ」や「ウガン」あるいは「オン」などとよばれ，村人のなかから神の託宣などによりえらばれた神女たちによってまもられている[8]』のであった．この神女たちは「ノロ」と呼ばれ，各地方の権力者(按司(あじ))の姉妹が役割を担っていた．聞得大君は，ノロを含めた三十三君の君階級制における最高位の君で，琉球最高位の神女であり，国王のオナリ(姉妹)がその任にあたった．つまりは国王のオナリ神であり，国王就任の儀式においても神の声を代弁し，「国王の就任祝福と国家の安泰と繁栄を祈願したといわれる[9]」．

斎場御嶽は，最高神女である聞得大君の知行地にあたるためであろうか，沖縄最高の聖地とされているのである．しかし他にも沢山ある御嶽(うたき)と呼ばれる聖地(『琉球国由来記』1713には909カ所が記されている[10])の主たるところの写真をみても，斎場御嶽ほどの大規模で甚しい天然の奇景に与るところは見あたらない．また真東に，神が初めて降臨したとされる神境の島，そしてニライカナイより五穀の種子が流れついたとされる島，久高島を拝することができる地，であるからこそ聞得大君の知行地とされたと考えるのがふさわしかろう．

聖なる島，久高島にも簡単に触れておく．創世神アマミキヨの上陸した砂州とかニライカナイから五穀の種子が入った壷の流れついた浜など四カ所ほどの聖地があり，なかでもフボー御嶽が第一の聖地である．ここは島のほぼ中央に位置し，内地では見かけない樹々ばかりが，高くはないが，根は地上を這い，葉を豊かにつけた枝が頭上に絡みあって繁り，暗く湿った道を行くと，豁然とひらけ，そこのみが天から差し込む光によって白く輝く地が出現する(写真❷－5)．直径約16メートル程のほぼ円形の開けた地である．天が開け，南の強い光がほぼ垂直に差し込むが，穏やかで心の安らぐ“場所”である．平地で樹々は低く，ただ見慣れない樹木ばかりのために違和感はあるものの，風にそよぐ葉々の影が動いてまわりにちらちらと光が振り撒かれて動くほかは，そこだけが明るく，まわりを暗部が包み，神

写真❷－5　フボー御嶽(久高島)．暗い密林の中にそこだけ白く眩しい場所がある．空地の向うの葉陰に拝所がある．(撮影：山下泉)

が降臨してその懐に抱かれるような，ゆったりと安らぐ気分が醸成されてくる．

森の中のこのような“場所”は，ドイツでも「Lichtung」といい，光(Licht)から派生した語で，あたかも光の柱が針葉樹の高く黒い森の中に立つさまは，ゲーテが今際の際に「もっと光を！」といったように北方のゲルマン人にとっては格別な想いが込められていたであろうことは想像に難くない．同様な森の中のひらけた場所は，神威に満ちたところとして島の人びとも感じとっていたであろう．

細長い島，その長軸も数十分で歩けてしまう小さな島，海と森との双方の聖地を備え，神話に満ちた神秘の島，近年(およそ1970年代くらい)まで鳥葬が営まれていた島，ここは今なお，霊力に満ちていると信じられている[11]．

地勢が人間に与える印象は，はっきりしている．殊に日常では見慣れない奇景をなすとき，そこに神意を読むことが多い．このようなとき，そこを聖地としての“場所”と認識してきたのであろう．その一例を瞥見してみた．　(1.2.執筆　山下　泉)

3．歴史のなかの“場所”── 活気・賑わいの場所
―中世都市鎌倉のはずれの地―

一

> 娑婆世界の中には日本国，日本国の中には相模国，相模国の中には片瀬，片瀬の中には龍口に，日蓮が命をとどめをく事は，法華経の御故なれば寂光土ともいうべき歟[1]．

この文は，文永八年(1271)九月二十一日，日蓮が相模の依智(厚木市)から鎌倉の四条金吾頼基に宛てた龍の口の「頸の座」を伝える消息の一節である．日蓮は「の中には」の連用で娑婆世界を片瀬の「龍口」にまで縮めている．文永八年九月十三日早旦，「名も畏ろしき龍の口」といわれた鎌倉幕府の刑場[2]で，日蓮は内密に処刑されようとした．しかし，助命あって表向きの罪名どおり佐渡ヶ島に流され，四年間の流謫生活を送ることになる．日蓮の生涯のなかでもっとも宗教的高まりをみせ，晩年にいたるまでこの「頸の座」の宗教的意味を語りつづけている．

弘安五年(1282)十月，日蓮は疾風怒濤の六十一年の生涯を閉じる．奇しくもこの年の春，「片瀬」の地に登場し，布教活動の場とした念仏僧は一遍である．遊行十六年の間一ヵ所に長くとどまることなく歩きつづけた一遍がここ「片瀬」に四ヵ月半も滞在し，鎌倉と対決しながら精力的に布教し，多くの帰依者，有力な信者を得ている．一遍にとっても片瀬の滞在布教が新しい一つの出発の道標になっている．

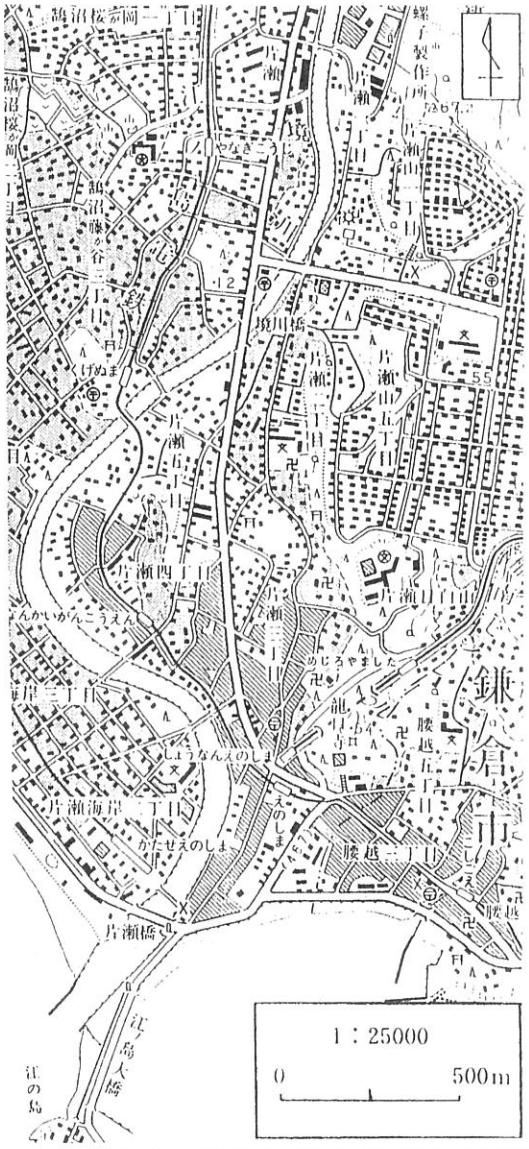
日蓮と一遍は鎌倉新仏教の第三世代で，彼等の活躍した時期の鎌倉は中世都市として最盛期であった．国内的には幕府の執権北条氏の嫡統の当主である得宗による専制政治が進み，得宗被官の勢力が強まり御家人との対立が激化しており，また，外的にはモンゴル問題があり，社会的不安が高まった時期でもあった．

この時期，中世都市鎌倉の西のはずれ「片瀬」の地は，「鎌倉の外[3]」「鎌倉の辺土[4]」として位置づけられていた．

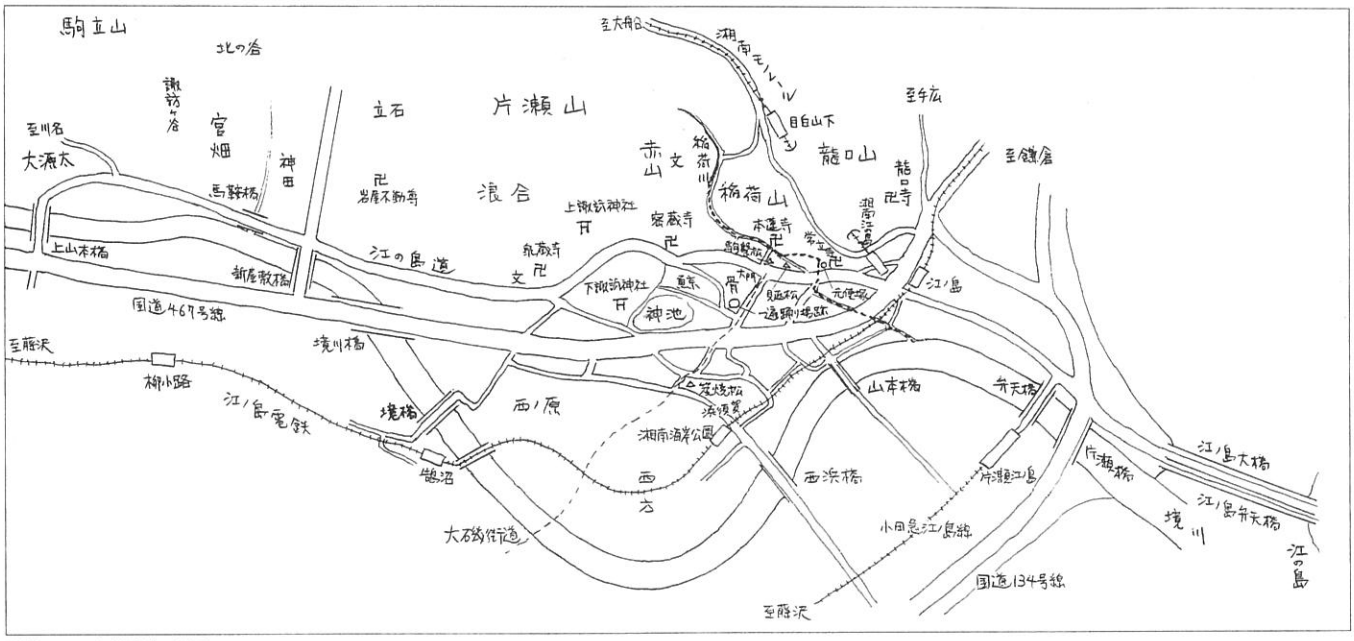
二

現在の片瀬地域は，藤沢市の南端，鎌倉市と境を接している地である(図❸－1，図❸－2)．東は鎌倉市と接する片瀬丘陵で，北から駒立山，片瀬山，龍口山などの山が連なり，西は境川の下流部の片瀬川をはさんで鵠沼に接している．南は江の島を眼前に相模の海原が開け，北は村岡の川名に接している．

「片瀬」が文献にあらわれるのは奈良時代である．天平勝宝元年(749)十月，鎌倉郡方瀬郷の戸主大伴部首麻呂という人物が，調庸布を中央政府に納めていることが正倉院御物として伝わる古裂の墨書銘[5]によって知られる．地名的に今日の片瀬が鎌倉郡の「方瀬郷」の名残りと考えて差し支えあるまい．



図❸－1　片瀬地域の地形図(国土地理院『江の島』平成8年7月発行)



図❸－2　片瀬地域の要図

往時の方瀬郷の中心は，現在の片瀬地域の北寄り「宮畑」あたりの地で，古くから集落が形成されていたようである．当地からは土師遺跡，その周辺からは横穴古墳などが確認されている[6]．宮畑の地（写真❸－1）は，片瀬丘陵から流れ出て境川に注ぐ小川（馬鞍橋のかかる小川）の流域から駒立山に連なる台地で，小川の周辺には「神田」の地名の水田があったといわれる．片瀬丘陵は標高約六十メートルで，東側の山から西側の境川へと傾斜しており，諏訪ヶ谷，北の谷などといったいくつかの谷戸を流れ落ちる雨水が田畑を潤したであろう．今では宅地化が進み，すっかり姿を変えてしまった．片瀬の鎮守諏訪神社（上・下社）は，今日浪合の山腹の地（上社）と鯨骨の地（下社）に鎮座する．当初は諏訪ヶ谷・宮畑の地が諏訪神社（上・下社）の鎮座地であったといわれ，養老七年（723）信州諏訪大社より御分霊社として勧請され，後に現在地に移されたという[7]．「諏訪ヶ谷」「宮畑」「神田」などといった地名は諏訪神社に由来するものであろう．

片瀬の中心地が現在の片瀬地域の南寄り，つまり境川河口の方へ移るのはおそらく平安中期以降であろう．平安中期に方瀬郷に代わって「大島郷」[8]が文献にあらわれるが，この「大島」は江の島を指したものと考えられ，そこに中央からの江の島の存在の重視がうかがわれよう．また，同時期の永承二年（1047），叡山の僧皇慶が著したという『江島縁起』が成立する．江の島にとって平安中期は中央信仰界に登場する時期であり，縁起にみられるその伝承がまた，江の島の聖地観をさらに高揚し，権威づけることになる[9]．

三

鎌倉幕府執権政治の始まりから幕府の崩壊までの約一世紀が中世都市鎌倉の最盛期である．この時期の都市鎌倉のはずれ「片瀬」の中心は，赤山・稲荷山の西側の「鯨骨」[10]あたりの地（写真❸－2）であった．なお，江戸時代には片瀬の中心地は稲荷山西側下の本蓮寺周辺で，門前と呼ばれ，高札場もあり，ここは「オフレバ」「ゴエンバ」とも呼ばれていた．このあたりは都市鎌倉最盛期の片瀬の中心地とほぼ重なる．

鎌倉時代の片瀬のメインストリートは「江の島道」（「鎌倉道」ともいわれる）（写真❸－3）で，藤沢，江の島，鎌倉を結ぶ片瀬丘陵ぞいの道である．江戸時代には大山参詣の人びとがその帰

写真❸－1　今日の宮畑あたり（境川にかかる新屋敷橋の後方は駒立山）（撮影：清田義英）

写真❸－2　今日の鯨骨あたり（右上片瀬山〈赤山〉，中央の森は諏訪神社〈下社〉）（撮影：清田義英）

りに江の島弁財天を御参りするのに使った道でもある．また，江の島道の本蓮寺門前あたりから西におれ境川を渡って唐ヶ原，大磯へとつづく道が「大磯街道」である．『新編相模国風土記稿』[11]には「鎌倉より大磯駅に達せし古道は海浜にあり」と記されている．この二つの道が往時の片瀬の主要街道であるが，その他に小道もいくつかあり，道の交わる辻の多い地域でもあった．比較的大きな辻として，江の島道と大磯街道の交わる辻（本蓮寺門前あたり）と，密蔵寺あたりで江の島道から分かれる脇道と大磯街道の交わる辻などがあり，ともに三叉路の辻である．道の交差する「辻」を拡大解釈すると「広場」が成りたつ．辻は「つむじ」と同様の性格をもつ言葉で，人びとが集まってくる場でもある．

鯨骨の地には現在「一遍踊り場跡」（写真❸－４）と伝えられる空き地がある．江の島道から西へ大磯街道を少し下ったところに位置し，江の島道にそう脇道と交わる三叉路の辻の角地にあたり，「地蔵面」と呼ばれるところである．このあたりに「かたせの浜の地蔵堂」があり，その近くで一遍は踊り屋という仮舞台を設けて踊り念仏を行った．現在の境川の流れはかつてはもっと東寄りで，踊り屋あたりの近くを流れ，水量も多く川幅も広く，海岸線も砂浜ももっと迫っており，そこは「かたせの浜の地蔵堂」[12]といわれるように「浜」と呼ぶにふさわしい場であったようである．

写真❸－３　江の島道（前方左側に頼朝駒繋の松・本蓮寺，そして西行戻り松がある）（撮影：清田義英）

写真❸－４　伝一遍踊り場跡（右道から手前へと下る道が大磯街道，左道は諏訪神社〈下社〉や江の島道〈密蔵寺あたり〉に通じる）（撮影：清田義英）

四

弘安五年三月一日，念仏による極楽往生を勧めて諸国を遊行していた一遍の一行は，鎌倉の北入口巨福呂坂（小袋坂）から鎌倉入りを企てたが，木戸のところで警固の武士たちに拒まれ，やむをえず翌二日「かたせの館の御堂」[13]に姿をあらわし，そこで別時念仏を行じている．そして，「六日のあした往生院へ召請したてまつり，一日一夜侍りけるに，又御使あるによりて，七日の日中にかたせの浜の地蔵堂」[14]に移り，そこで踊り念仏を行っている．

弘安二年（1279）の秋，一遍は信州小田切の里で踊り念仏を始めたといわれる．次いで同年の冬，信州佐久郡の大井太郎の館でも踊り念仏を行っている．『一遍聖絵』の詞書には，

> 小田切の里或武士の屋形にて聖をどりはじめ給けるに，道俗おほくあつまりて結縁あまねかりければ，次第に相続して一期の行儀と成れり．

と記されている．しかし，このときにはまだ踊り屋はなかった．ところが，弘安五年三月「かたせの浜の地蔵堂」で，踊り念仏をより効果的にみせるため初めて高床に屋根つきの二間に四間ほどの仮舞台の踊り屋が創出されることになる．一遍の片瀬の浜の滞在は，一遍の一行が結団の形をとりつつ，踊り念仏をある種の秩序をもって芸能・様式化し興行した時期であったともいえる．[15]

図❸－３　かたせの浜の地蔵堂踊り場〈『一遍聖絵』清浄光寺・歓喜光寺蔵〉

片瀬の浜の踊り念仏興行の様子が『一遍聖絵』に見事に活写さ

れている(図❸－3)．かつて拙著のなかで，その光景を次のように述べたことがある．

周囲の見物人より一段と高く，あきらかにみせるように造られた高床式の切妻の舞台，その上で一遍を先達として多くの老若の時衆が鉦鼓を打ち鳴らし念仏を唱え，裾をひるがえしながら床を踏みならし，二重になってなかには手を打ちながら右廻りに駆け足で踊っており，踊躍歓喜の気持ちを体で表現し，法悦に陶酔しています．舞台をとりかこむように周囲には大勢の善男善女が集まり，これを見上げています．武士・僧尼・琵琶法師・絵解き比丘尼・頭巾をかぶった人・塗笠の人・市女笠の人などさまざまです．床の板を踏みならしきしむ音，称名の声，鉦の音……あまりのやかましさに思わず耳に手をあてたくなるような光景です．人びとはそれぞれ思い思いの態度でこの踊躍念仏に対しており，一遍はみごとに演出しきっています．[16]

踊り念仏の興行はここに成功を収め，

かたせの浜の地蔵堂にうつりゐて，数日ををくり給けるに，貴賤あめのごとくに参詣し，道俗雲のごとくに雲集す．同道場にて三月のすゑに紫雲たちて花ふりはじめけり，そののちは時にしたがひて連々この奇瑞ありき．[17]

と詞書は記している．この奇瑞はまたたく間にひろまり，人びとは一遍のまわりに雲集し，たいへんな賑わいをみせる．

五

『一遍聖絵』の踊り屋のまわりを熟視すると，道を急ぐ裸足で脛巾をつけ頭巾をかぶり杖を持った荷持ちの男，蓑帽子をかぶり弓を持ち腰には空穂をつけた狩人が，背に小櫃を乗せた馬を追い先を急ぎながら舞台の踊り念仏を注視している．簡素な鳥居の横の民家は，板葺屋根の網代壁で庇の板間があり，その奥の間との間は土壁でしきられている．そして，うまやもみられる(図❸－4)．

踊り屋や地蔵堂へつづくと思われる道の両側には粗末な小屋が立ち並んでいる．乞食たちの小屋でのさまざまな情景が描かれている．小屋は地蔵堂の縁日にたつ市などを当てにしている乞食たちの住処であろうといわれている[18]が，市のひらかれないときに乞食たちがその小屋(市屋)を使用したとも考えられよう．また，そこには「はずれ」を象徴する動物である犬とカラスが描かれている．当時の人びとにとって犬とカラスは，他界との往来をする境界的霊的動物として意識されていた．[19]

図❸－4　狩人・荷持ちの男・うまや〈『一遍聖絵』清浄光寺・歓喜光寺蔵〉

浜の地蔵堂の縁日にはおそらく市がたったであろう．市は辻などにたつといわれる．そこには人びとに幸運を与えるという信仰も生まれ，辻の守護神である市神のもとで市がたつ．つまり市が存在するところは聖域であって，市神が支配している“場所”でもあった．[20] また，「浜の地蔵堂」といわれるように，浜などが市場になった例はひじょうに多い．市がたつと諸方から人びとが集まって来て，物を交換したり，漁具・農具などの鉄製品，焼物・衣類などを手に入れる．市をたてるとき人びとはまず市神を祭る．神をよび喜ばせるためのさまざまな芸能も行われた．[21] 一遍が乞食たちを伴いとくに市や宿や寺社の門前などを遍歴し，念仏興行を行い布教活動の場としていた事実に注目しておきたい．

六

眼前に相模の海，そして，西側を流れる川が町田市の最深部の大地沢を水源とする全長約六十九キロメートルの境川で，相模の海に流出している．川の上・中流が旧武蔵・相模両国を流れるので境川と呼ばれ，流域によって田舎川・高倉川(大和市)，音無川・片瀬川(藤沢市)などと呼ばれる．また，片瀬山を水源とする稲荷川は稲荷山の裾を下り，本蓮寺前，常立寺横を流れて境川に注いでいる．この川はかつては蛍がとびかうような清流であったが，現在ではそのほとんどが暗渠になってしまっている．他に小川，大小の湖沼，湧水など，往時の片瀬は清流・清水のある地であった．

古老は言う「昔は片瀬でよく虹をみたものだ……」と．虹といえば，市は虹がたっているふもとにあたるといわれ，古代から中世にかけて，虹がたつところには市をたてなくてはならないという考え方があった．[22] 人はしばしば虹の下に行ってみたいという願望にかられる．何故そこに行きたいのか．そこに泉があり，市がたっていて幸運に恵まれると説明される．「虹」の語源の一説に「蛇の精であるヌジの転」[23]とある．とすれば，虹がたつということは，そこに龍神つまり水神のあらわれることを意味し，そこに市がたち，幸運が集約されることになる．

片瀬の地，それも一遍の踊り屋の近くには水を司る龍神，水辺の神，稲作の神などといわれる諏訪神社(下社)(写真❸－5)があり，神社の南側にはかつては境川とつながっていたと考えられる神池(諏訪池)と呼ばれていた水量の多い大きな湖沼があった．しかし，昭和三十年頃に埋められてしまい，今は民家が

立ち並んでいる．

諏訪神社(下社)は，松の大木の茂る鎮守の森に現在鎮座する．江の島道ぞいにもかつては大きな松がみられ[24]，ここちよい木陰をうみだしていた．松にかかわる伝承もみられ，源頼朝駒繋の松，西行見返りの松(戻り松)，駿河次郎清重笈焼き松など，江の島道と大磯街道ぞいに伝わる[25]．また，江の島道ぞいには「元使塚[26]」「梵天塚[27]」などと呼ばれる塚があり，とくに建治元年(1275)九月，龍の口刑場に無残にも露と消えた元使杜世忠ら五人の墓と伝えられる元使塚には，昭和四十年頃まで二本の大きな松がそびえていた．しかし，今は枯れて二本ともない．松は一年中みずみずしい緑を保っているため縁起のよい樹木，不浄なものを清める霊力をもった神聖な樹木であるとされている．古代から中世末期にかけて墓の上または墓地に樹を植える風習はきわめて普遍的であったといわれ，その樹は松が多かった[28]．

七

一遍が片瀬の地で，鎌倉と対決しながら四ヵ月半滞在し，踊り屋を創出し，踊り念仏を興行し演出し得た背景には，鎌倉の託磨僧正らのバックアップがあったことは首肯される[29]が，しかし，当地がまた都市鎌倉の外，つまり「はずれ」であったことにも留意すべきである．「はずれ」とは「場所や物などの範囲をちょっと出たところ[30]」であり，この「ちょっと出たところ」に意義がある．そこは都市鎌倉の都市法〈統制令・禁止令〉などの適用されない地域である[31]．それ故，おもいきった大衆的な布教を可能にし，踊り念仏を興行することができた．

鎌倉に幕府が開かれると，片瀬は鎌倉の西の出入口として鎌倉と京都を結ぶ街道筋の要衝となり，幕府は馬や食糧を徴発する「固瀬駅」(固瀬宿[32])を置くことになる．『一遍聖絵』に踊り屋のそばの道に面した民家にうまやが描かれており，馬がなにやら食べているこの場面に注目しておきたい．眼前の江の島は幕府にとって神聖な島となり，東の聖地六浦と対置される．また，

写真❸－5　諏訪神社(下社)(撮影：清田義英)

今日片瀬の地と接する「腰越の浜」あたりが龍の口刑場として，多くの人びとが処刑され「畏ろしき龍の口」となる[33]．

片瀬の地，とくに「かたせの浜」あたりは神仏の支配する「無主」の場で，都市鎌倉の「はずれ」として位置づけられ，そこは一遍ら宗教家の情熱あふれる活気に満ちた布教の場として「貴賤上下群集[34]」する喧噪の地であった．踊り屋の仮舞台をつくって，多くの人びとが見に来たところで踊り念仏を行い布教を展開する場は，多分に町屋的な場でなくてはできないと思われる．当地には寺社・堂などがあり，人家も相当立ち並んでおり，鎌倉の西の出入口として人びとの往来も多く，市もたち，そこはまた鎌倉と地方の情報が渦巻く“場所”であり，宿的な町屋としての様相を呈していたのである．

(執筆　清田義英)

4．現在に生きる“場所”── 娯しみ集う場所

新潟県・群馬県・栃木県に三方を囲まれた福島県西南部の最奥，南会津郡の西端，尾瀬沼と尾瀬ケ原との北半部を村域に含み，2000メートルを越す山々が周囲をめぐる狭い谷間に集落を営む(写真❹－1)檜枝岐(ひのえまた)村(図❹－1)．冬に積もった雪をシートを被せて保存し，1999年の夏には長さ100m，幅60mのゲレンデをオープンしたほどの豪雪地帯で，最近こそ減ったものの，近年までは集落の背部をなす山からの雪崩の害に苦しめられてきた．現在なお，通ってくるバスは1日に5本という隔絶地である．しかし，村の中央を川に沿って通る道は，この村が行き止まりではなく，古くから村を抜けて更に沼山峠を越えて上州の沼田へ通じる街道であったため，江戸時代には産品の領外流出を防ぐための検問所として木戸を備えた番所が置かれていた．1999年7月末現在の世帯数212戸，人口678名(内，成人539名)という小さな村である．

江戸時代，歌舞伎が会津で盛んに興行されたのは寛政・文化の頃であったから，ここ檜枝岐へ伝わったのも会津中央よりは遅れはしたものの，やはりこの頃であったと思われる．文化7年(1810年)改の村勢図面(図❹－2)には，現在の舞台の位置に拝殿と記される建物があり，村の人が舞台を「舞殿」または「拝殿」と呼ぶことからみて，絵図の「拝殿」は舞台と考えられ[1]，この当時すでに舞台が存在していたことがわかる．

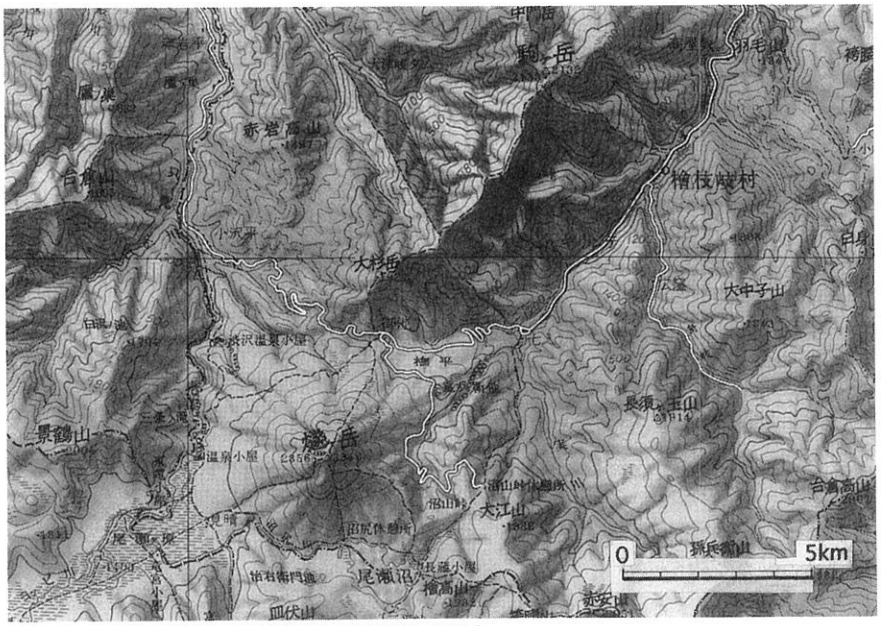
雪深く，冬は通行は途絶してしまう僻遠の土地柄もあってか，伝わった歌舞伎を唯一の娯楽として伝承してきた．鎮守祭礼の奉納芸能の芝居として，ただ鑑賞するばかりでなく，村民全員が自ら演じることで，なおさら興味を増幅するとともに，子から孫へと伝えていったのである．「村民は誰もが一度は舞台に上ることをほこりとして，其筋や，せりふも諳んじて居るので一層興味をました[2]」といわれるごとくである．さらに檜枝岐村史には「一生に一度は必ずお伊勢参りがしたいというのが当時の民情であったが，その参宮の帰り江戸を通る際に，檜舞台での歌舞伎を必ず見るものとなっていたがその際，特に好きな者たち

が器用に見覚え」[3]るだけでなく，明治末期・大正・昭和にかけて，近在出身の本業の役者たちから指導や振付をうけて一層の振興をはかってきた[4]．昭和40年前後は一時後継者が少なくなって存続を危ぶまれたが，現在は千葉之家花駒座なる一座を組んで保存伝承につとめている．

無形の文化財がこうして伝承されてきた事実は，自ら演じて公開することで成り立ってきたのである．そのための舞台が，鎮守神の社殿前に設けられているのである．現在の舞台は，大火で明治26年に焼失したあとの，明治33年再建と推定され[5]ており，国の重要文化財に指定され(1976年)て現在に至っている(1999年５月の歌舞伎奉納中に天井裏から出火し，屋根を燃したが，すぐ復旧し８月の例大祭には支障なく歌舞伎が上演，奉納された)．

日本全国にこうした農民歌舞伎や能，人形芝居などのための舞台は(山車などの移動舞台を除いて)昭和45年の時点で1777棟，このうち当時存在した歌舞伎舞台は1112棟あったと報告され[6]ており，農民歌舞伎の人気の高さ，根強さには圧倒されるものがある．会津も例外でなく，檜枝岐の近隣(南会津)でも，1995年に福島県立博物館で催された「村芝居の世界」展で檜枝岐以外に７ヵ所の舞台が写真展示で紹介されたが，それらは建物が残っているのみで，実際に上演され使われているのは1998年現在で檜枝岐のみである．これは娯楽の対象がテレビそして町部ではビデオ等へと変化したことによる日本全国にみられる芝居興行そのものの衰退現象からいって当然のこととはいえ，直接の要因は，現地に芝居を打つ役者一座がいない(もともといない，もしくは絶えてしまった)ためであろう．例えば隣村の大桃の舞台

写真❹－１　檜枝岐村全景(中土合公園上展望台より北北東を臨む)．白矢印は舞台の位置．(撮影：山下泉)



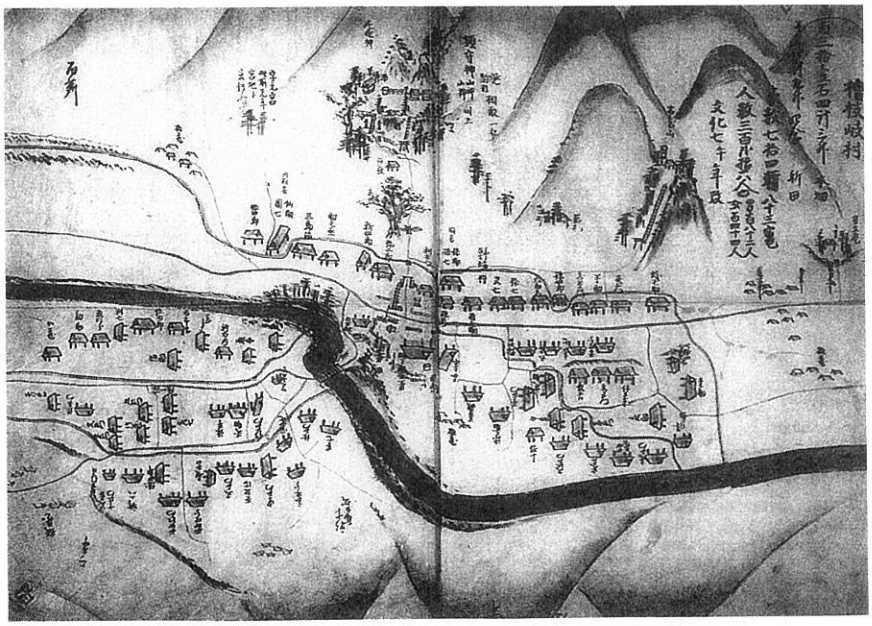
図❹－１　檜枝岐の位置(国土地理院『日光』平成９年９月発行)

は檜枝岐と同年に国の重要文化財に指定されいるがずっと大きく(舞台間口で190cm，奥行で86cm大きい)立派で，かつもっとダイナミックな演出が可能な舞台構成がとられているにもかかわらず，早くも明治40年には地元民役者による地芝居は行われなくなって，その後は一座を招いての買芝居となってしまった[7]．建物は重要文化財となっても，使用されなければ荒廃は進むばかりである．これは本研究のテーマである“場所”の衰退とも重なるのである．もはや人びとの心や生活にかかわりがうすくなれば，人びとに“場所”として認識されなくなり，実体としての場所性を失うこととなる．

まえおきが長くなったが，ここでは檜枝岐村の歌舞伎舞台と観客席(すなわち鎮守神社境内)を“場所”の対象としてとりあげる．上述したので，歌舞伎が上演されつづけてきた経緯や古さについては，これ以上直接には触れる必要はないであろう．しかし村民が演じ，鑑賞するためには，舞台だけではなく，舞台と観客席とが一体になってこそ，芝居を楽しむ“場所”が成立するのである．その点について以下に考察する．

舞台および観客席へ至るアプローチ，すなわち参道から見てみよう．川に沿うメインストリートから階段を7段昇り，鳥居をくぐる．両側に木製の灯籠が立ち，更にその外側には家々の軒が連なる．中央に幅1.75mから2mにと徐々に太くなる石畳が，いくぶんうねりながら，途中で橋になって池をまたぎ，45m程行くと，左手の家並が途切れて畑地となり，その向こう10m程さきに高さ1.3m程の石垣の上に建物の裏面があらわれる(写真❹－2)．さらに15m程すすんでこの建物の側面を半ば以上過ぎたところに左右対の二基の石灯籠と再び鳥居があり，その奥の4段の階段を，踏みはずさないよう足元を注意しながら登り，ほっとして前を見やると，山の大きな斜面とそこに繁る樹々，その影になりながら境内をなす小さな平坦地，それを囲んで急な斜面に沿って上へ向かってつくられた石段の観客席，それらが一気に眼の前を覆い，あっと息を呑む迫力で包みこまれる．左手の建物は舞台であった．

写真❹－2　鎮守神参道(舞台へ至るアプローチ)．左手石垣の上に舞台が建つ．
(撮影：山下泉)

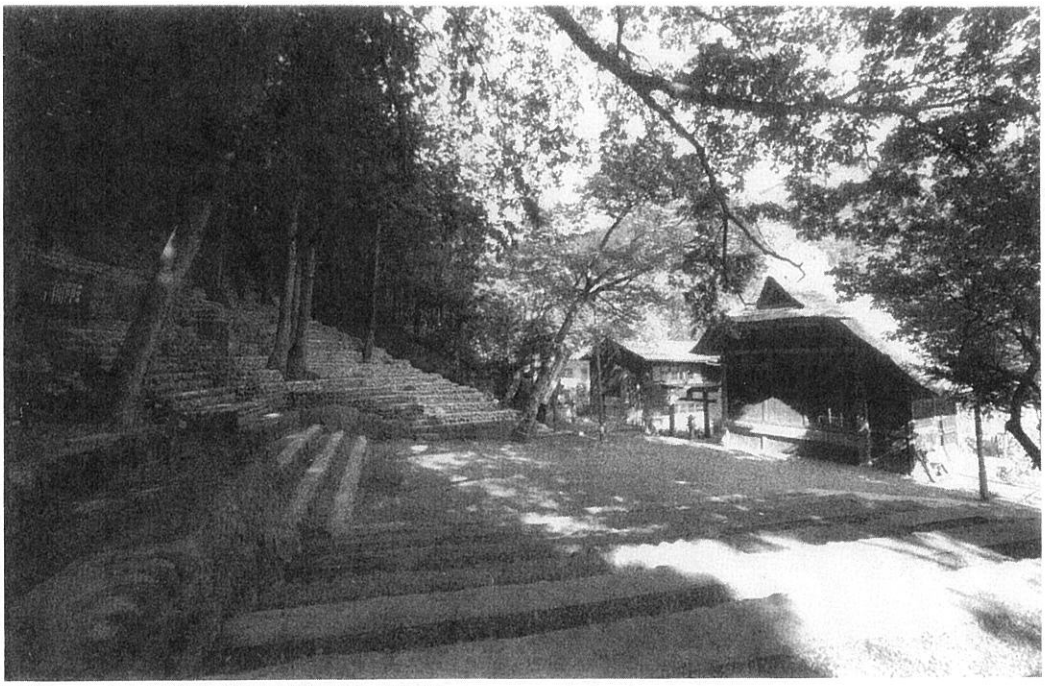


図❹－2　檜枝岐村古図(1810年)

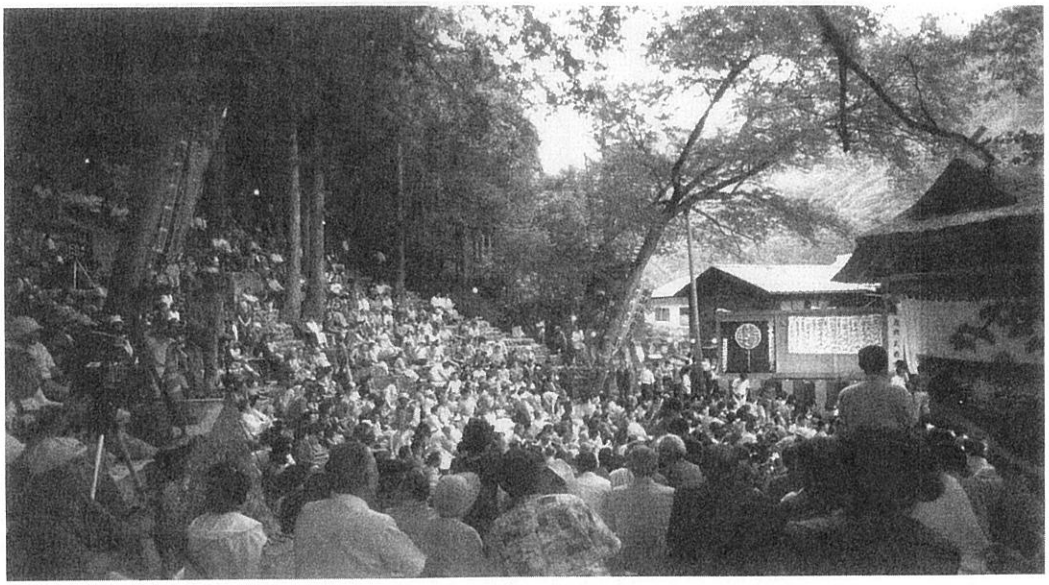
舞台は山の斜面を向いてひらき，中腹にある社殿に向きあう．斜面中央の階段が鎮守神の社殿へ至り，中途から左へ別れて階段を登り右へ折れると，鎮守神の社殿から左隣に12m程はなれた疱瘡神の社殿がある．これら二つの社殿の前面から，下へ向かって石段で観客席が中央部で15段，脇の多いところで20段前後，舞台前面の平土間にあたる平坦部を三方から囲むかたちで築かれる．これら石段の席の中には昔からの巨木が30本程残されてそびえ立ち，その枝葉が自然の天蓋をなし下に緑陰をつくる．まさに山懐と樹々があやなす地形の妙にわずか人の手を加えたのみで，絶妙に“場所”を創出しているのである．この設(しつら)えの演出を解明すべく，ここを実測して，配置図(図❹－3)と断面図(図❹－4)を作製した．

配置図にみられるとおり，舞台は鎮守社殿とほぼ正対し，石階段の軸線は舞台建物の太夫座を含めた全幅の中央(舞台幅の中央ではない)に一致する．しかし角度は多少ずれており，石階段の軸線に対して舞台前面は90度ではなく，ややずれて受けるかたちとなっている．石段と舞台との間が平坦地となり，この間約16mで，石段が三方を巡り，この間口が約12m，歌舞伎上演時にはここが平土間となるのである(写真❹－3，写真❹－4)．だが舞台下手側が出入りの通路となるため，実際の使用上はもう少し狭くなる．

この平土間は断面図でみるとおり，水平面に対して約2度の



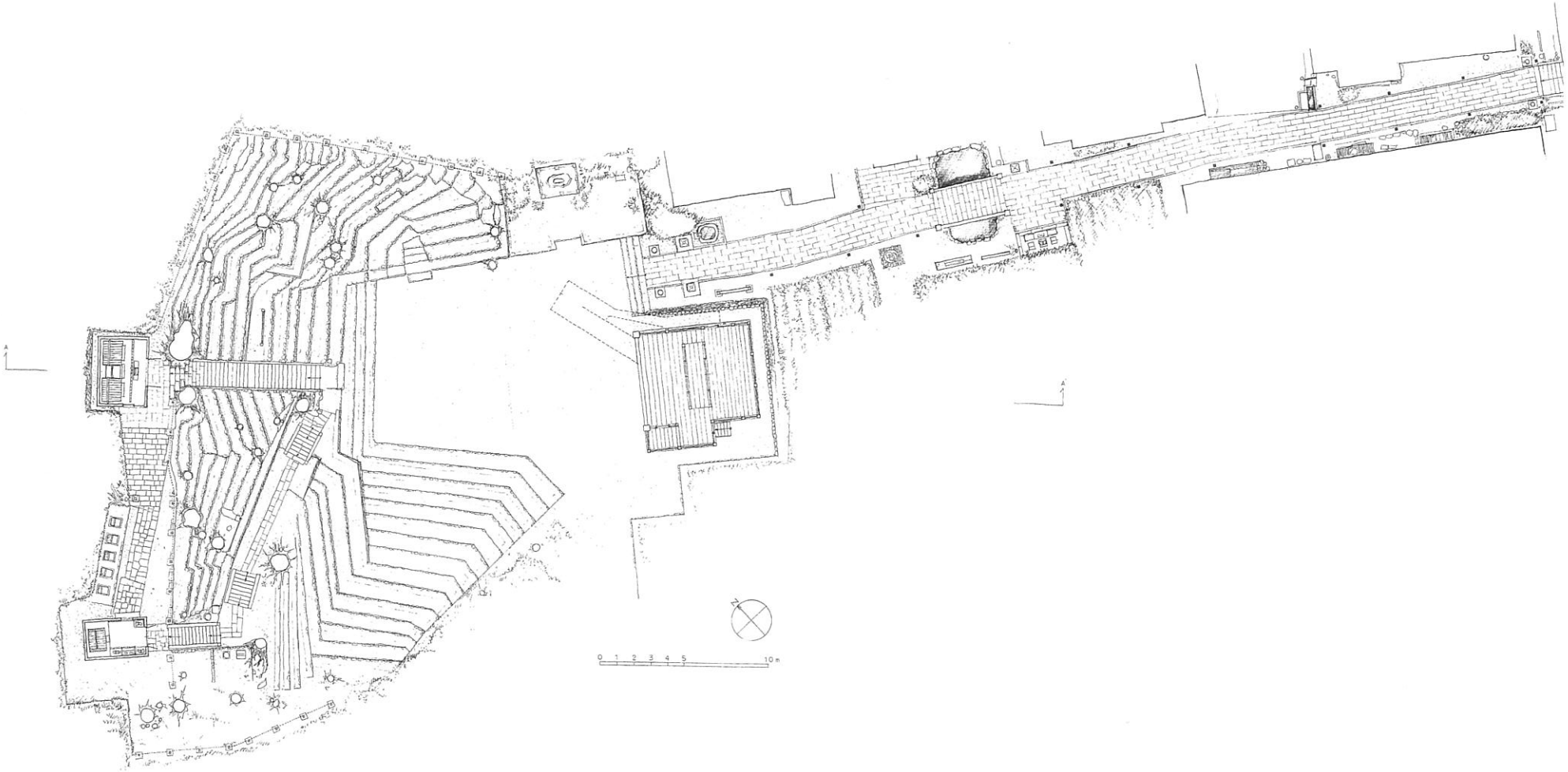
写真❹－3　舞台と客席段の関係(空席時)(撮影：山下泉)



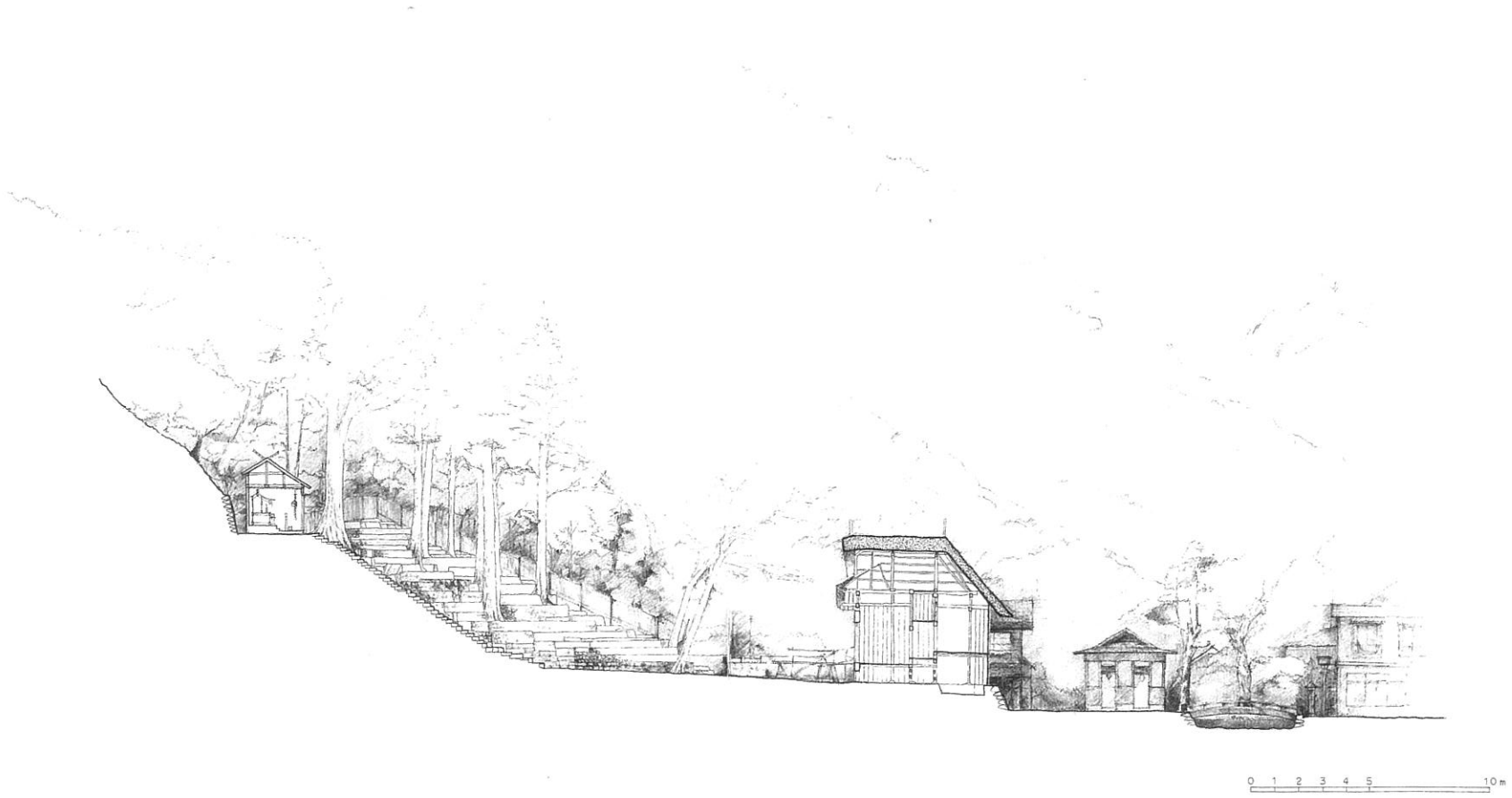
写真❹－4　舞台と客席段の関係(席を埋める観客)(撮影：山下泉)

殿とほぼ正対し，石
幅の中央(舞台幅の
少ずれており，石階
ややずれて受ける
平坦地となり，この
約12m，歌舞伎上演
ー3，写真❹ー4)．
実際の使用上はも

面に対して約2度の



図❹ー3　鎮守社境内(舞台および周辺)平面図．点線は以前の舞台前面位置を示す．(実測・作図：大塚亮一・木下周介・萩原卓，描図：岸本章)



図❹－4　鎮守社境内(舞台および客席廻り)A－A'断面図(実測・作図・描図：大塚亮一・水下周介・萩原卓)

角度で舞台へ
なっている．
れ，直接に座
は，座ぶとん
繰りこんでく
を数十個なら
られる(写真❹
平土間を三
前まで7.3mの
でほぼ等しい
るのだが，水
え31度をなす．
傾斜面を横か
度のうける印
登山やスキー
じられ，恐怖
れている．つま
にとり囲まれ
ここに座る人
に親密感を覚
されているの
以上は現状
再び近年に二
を後ろへずら
年)こと，もう
設され現状に
で，ただ疱瘡
に平土間を囲
ていた程度で
❹－5)では，
いる．
舞台の後退
ことを当然な
土間後部の三
と思われる．
これから判断
ろの階段を登
壇となって畑
に舞台がある
台とほぼ同じ
しては機能し
と広く平土間
そもそも鎮
(810年)に祭ら
いであろう．

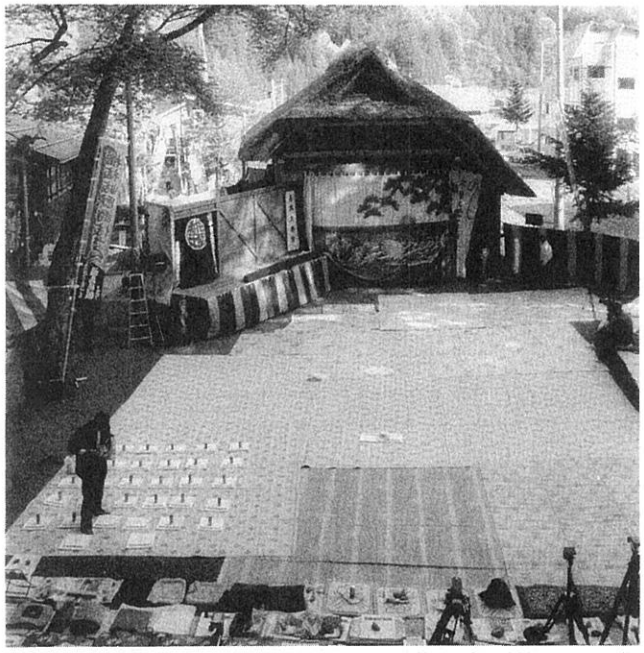
角度で舞台へ向かう下り傾斜となり，いくぶんか舞台が見易くなっている．現在は，上演前にビニール・シートが敷きつめられ，直接に座れるようにしており，村の人や民宿に泊る人たちは，座ぶとんを持参してきている．観光バスでツアーを組んで繰りこんでくるのか，添乗員らしき人が四角いウレタンマットを数十個ならべてあらかじめ席を確保してまわっている姿も見られる(写真❹－５)．

平土間を三方から囲む石段は，かなりの急角度で，鎮守社殿前まで7.3mの高さにそそり立つ．舞台屋根より0.3m低いだけでほぼ等しい高さである．断面図からみては，傾斜は緩くみえるのだが，水平面に対し33度で，緩傾斜する平土間に対してさえ31度をなす．これは眼による知覚の違いによるもので，同じ傾斜面を横から見るのと，真上または真下から見るのとでは角度のうける印象が違って感じるのである．30度の斜面といえば，登山やスキーの際に上から見下ろすと切り立った絶壁に近く感じられ，恐怖感すら覚えるほどであることは経験的によく知られている．つまり，絶壁といえるほどの急斜面とそこに繁る樹々にとり囲まれた，平土間(境内)，という構図が理解されよう．ここに座る人びとに，抱かれたような安堵感をもたらし，互いに親密感を覚え，舞台と一体になれる，際だった“場所”が現出されているのがよくわかる．

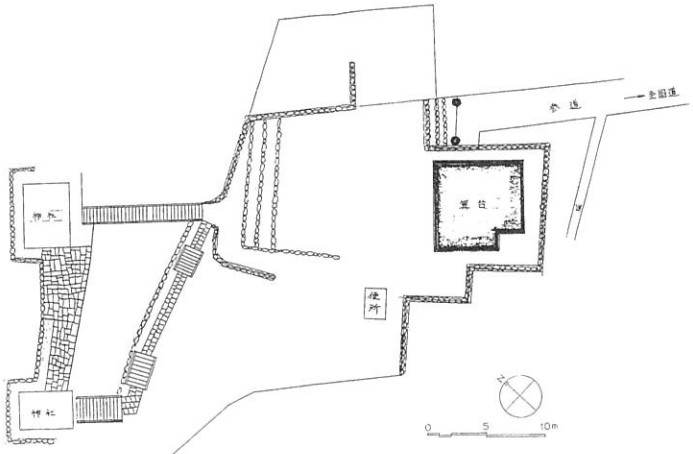
以上は現状の情景であって，つまりは観光化の影響をうけて再び近年に二点ほど手を加えた結果である．一点は舞台の位置を後ろへずらし，平土間をほぼ２倍以上の広さにひろげた(1981年)こと，もう一点は，山斜面の観客席を石段化した(徐々に増設され現状には1995年施工）ことで，以前は地肌のままの斜面で，ただ疱瘡神社へ行くための階段の山側脇と，中央階段下部に平土間を囲むように凸形の段が平土間後部に三段のみ築かれていた程度であった．1975年に作成された境内の配置平面図(図❹－５)では，舞台はすでに後退され，これら石段もつくられている．

舞台の後退は観客数の増加に伴う，客席数の不足を解消することを当然ながら目的とされたわけで，恐らく，少なくとも平土間後部の三段の石段は舞台後退時かそれ以後に行われたものと思われる．なぜなら，舞台の旧礎石がいくつか残存しており，これから判断すると，旧位置は現在より約7.8m前で，鳥居の後ろの階段を登り切った高さの線がそのまま伸びて舞台背部の土壇となって畑地から高くなっていたものと推測され，この位置に舞台があるとすれば，石段があると平土間は極めて狭く，舞台とほぼ同じ広さぐらいの面積しかないこととなり，平土間としては機能しないからである．元来は自然の山斜面なりにもっと広く平土間がひろがっていたと考えないと不自然である．

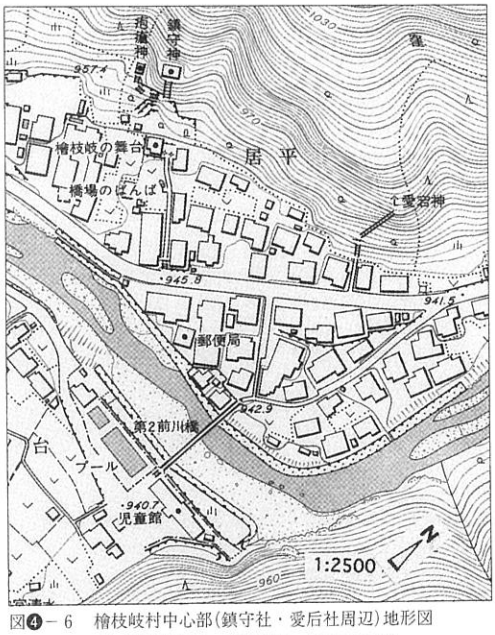
そもそも鎮守である駒形大明神は，伝によれば弘仁七丙申(810年)に祭られた由[8]であり，恐らく以来その地は移動していないであろう．地形図(図❹－６)からみるとその位置は，山の鼻



写真❹－５　舞台・花道と平土間．座布団やマットを敷いて席を確保している．花道の端部に揚げ幕．(撮影：山下泉)



図❹－５　舞台廻り旧配置図(1975年頃)



図❹－６　檜枝岐村中心部(鎮守社・愛后社周辺)地形図
(檜枝岐村発行，八州調製，1988年測図)

とでもいえる，山襞がちょうど村側へ突き出した部分にあたっている．そして他と比べて急傾斜で下って平坦部へ至るが，川との距離が割合と離れて，平坦部を広くとりやすい地形をもっている．鼻のように突出するということは，そこから左右と下部に広がる村域を，国見のように眺め渡すに都合のよいことを示している．もっとも，他の地に享保20年(1716年)に後から祭られた愛后神は，「村を見渡すことのできる最もよい場所にある」[9]とされているが，その900年前のまだ開けない頃には集落の位置はいかがであったろうか．文化7年（1810年）の古図（図❹－2）には，家数74軒で人数326名と記されており，既に愛后神社も描かれていて，鎮守と愛后神の間（直線距離で約120m）の下に四十数軒の家数があり，川の反対側で鎮守より西方に残り三十軒あまりの家が並んで描かれている．従って，鎮守からは前の樹木が遮らなければ，ほぼ村の家々が見渡せたことであろう．

このように鎮守の神域が特殊な位置を占めていたということは，それなりの重い意味を担なってのことと思われる．

通常，日本の神社形式では，山を御神体とし，その麓の部分に社殿を設けて祭ることが多く行われている．鎮守には駒ケ嶽の頂に鎮座するとされる駒形大明神と，灯嶽の火打大権現の二神が祭られており[10]，いずれも山岳の神である．これら鎮守の神々に見守ってもらうには，村の家々を見渡せるこの地がふさわしかったと考えられる．

稲は寒冷のため全く育たず，粟とそばの畑作と，副業として山業（曲物類，カンジキ，榀縄等）を営むばかりの生活[11]にとって，山岳の神である鎮守は頼りにすべき神々であったろうし，生活における信仰の領分はさぞかし大きかったと思われる．畑仕事ができる温暖期には畑地近くの出小屋で寝泊りし，寒冷期になってやっと集落の住居へ戻ってきて暮す，という生活ながら，鎮守の境内は村人たちの精神的中心を占める“場所”として確立されていたであろうし，そこで上演される歌舞伎は，祭礼とあいまって一年の華であったに違いない．ストーリーを知り，台詞も諳んじ，どこそこの誰それが演じる今夜の歌舞伎，胸中に沸きおこる感興にせきたてられて挙って集まる“場所”，平常と異なり，彩どりはなやかな幟がひらめき，稽古だろうか，三味管弦の音も途切れとぎれに聞こえ，屋台もちらほら並び，設らえも整って一層の興趣をそそる．

愛后神は5月に例祭で，社殿の位置は離れているが奉納歌舞伎は同じ舞台で行われ，鎮守神の例祭は8月で，年に2回上演される奉納歌舞伎は，信仰のうえに最大の娯楽が催される至高のイヴェントであったわけで，そのために集う“場所”は，人びとの生活においても心の中においても重要な位置を占めていたといえるだろう．

この意義に応え，意義を成立させているのが，ここのつくりである．すでに述べたが，山の斜面を観客席にして擂り鉢を半分に切ったような形状をとり，その底面に平土間があり，扇の要の位置に舞台がくる．文章で読むと，まるでギリシアの円形劇場を想い起こされようが，人工性の点では全く違う．地形を利用しながらも石で埋めつくした明確な幾何形態がギリシアではとらえるが，それと比べてもっと原始的というか，土地にこうしてほしいといわれて，そのまま素朴に手を加えてできたという様子で，芝居見物には邪魔になるのにかかわらず樹々はそのまま残し，自然を損ねない．川向こうの山から見ても観客席があるようには見えず，木で覆われているばかりである．観客にとっても，樹々はその枝葉が頭の上を覆って天井を形成して緑陰となるが，それにもまして，視線を舞台のみに限るはたらきをなしていて，この役割が一体感を醸成するのに大きな要因となっている．

舞台は，固定の他に下手前面から斜めに客席の方へ仮設の花道を突き出す．これは，平時は舞台前面，約6.7mの間口全体を閉じている一枚雨戸を，虹梁柱脇の軸で回転して開いて背板とし[12]，その前側に板の床を敷いて花道とする仕掛けで，左端部に揚げ幕を垂らす(写真❹－5)．能舞台の橋懸かりが，同じく下手ながら舞台後部から斜めうしろへ伸びているのとは，ちょうど逆の構成である．この花道が，裏面では鳥居をくぐって出入りする人たちの動きを巧みに誘導すると同時に，出入りの動きを観客からは見えないように遮り，舞台が手を広げたようなかたちで伸長して平土間をつつみこむ．

斜面をなす山裾の地形，人びとを抱擁するような擂り鉢状の桟敷，その天蓋をなす巨木たちの枝葉，舞台を拡大し平土間を包みこむ花道の装置．こうして春と夏の例大祭に，大地と人工物と人びととが一体となって“場所”が息づくのである（写真❹－6）．

ところで，娯楽も増え，信仰心もうすれた現在，この“場所”はどのように変ったであろうか．観光化の進むなかで尾瀬を訪う人びとの宿として，また冬のスキー場として，多くの家々が民宿を営み，バスこそ1日5本と少ないものの，各戸が自家用車を持ち交通手段にこと欠かず，50年前とはまったくの様変りである．生活様態については調査の対象としていないため，内部的状態は不明であるが，外部から見た限りでは観光化の波を要因とした変化が最も大きいと感じられる．気候だけは変らないものの，もはや秘境ではなくなったのである．流通の革新やテレビによって日本中どこも同じものを着，食べ，見る．それでも町・都会と違って遊ぶ所は少ないであろうが，古いもの，殊に古い家(この地方独特の曲り家)は遺棄され，廃屋となり(写真❹－7）どこでも見られるような家々が並び，特徴のない集落と化しつつある．

こうした現況のなかで，少数ではあるが，村の人びとからイメージ・マップとアンケート回答を得ることができた．19歳，21歳が各1名，60歳以上が5名（アンケートは1名欠）の計7

写真❹－6　上演中の舞台と人．ほんのり明るい頃から開演され，背景の山・樹々・舞台・人々が一体となって，徐々に暗闇につつまれていく．（撮影：山下泉）

写真❹－7　廃屋，立派な曲り屋だが屋根には草が伸び，打ち棄てられている．（撮影：山下泉）

名（イメージ・マップ7名，アンケート6名）で，年齢的には2グループに分かれ，偏っているがかえって傾向がはっきりとわかる．

アンケート項目は次のとおり．

1.檜枝岐村のなかで，あなたが好きな場所はどこですか

①　　②　　③

2.檜枝岐村のなかで，あなたにとって大切な場所はどこですか

①　　②　　③

3.檜枝岐村を他人に説明するとき，場所の名前を挙げるとしたら，どこですか

①　　②　　③

4.歌舞伎舞台のあるところへ何回くらい行きますか

年に，　　月に，　　週に，　　____回くらい．

ほとんど行かない．

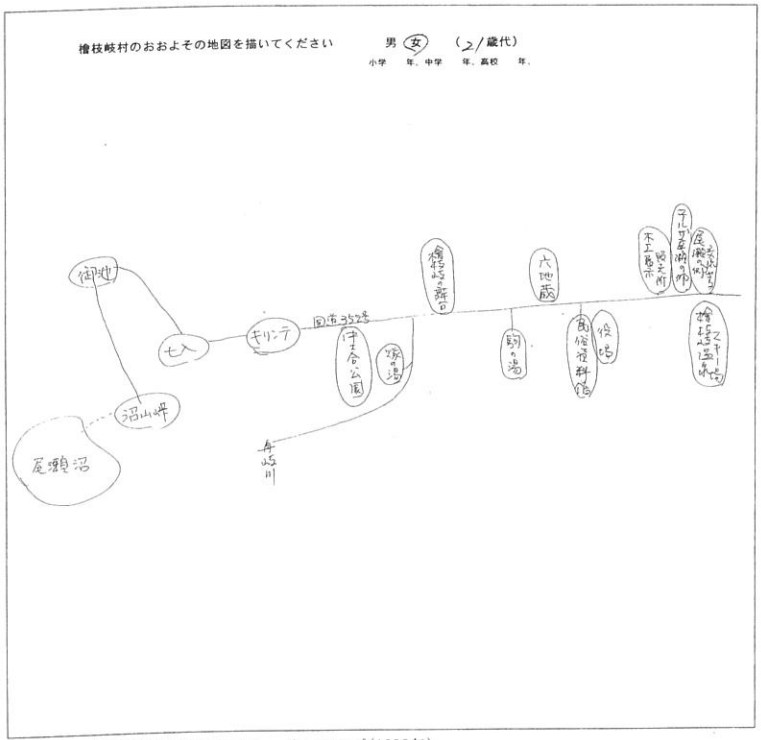
行く場合はどのようなときですか

また，その場所について，あなたはどう思っていますか

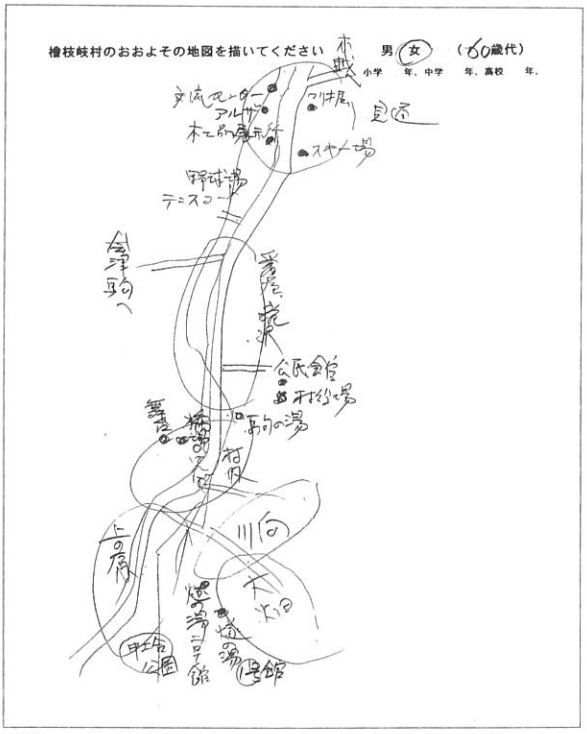
イメージ・マップは設問が誤解され，檜枝岐村の存在する位置関係だけを示す図示が2件もあり(60歳以上)，「村内の地図」と記すべきであったと反省している．アンケート中1.2.3.のいずれかに「舞台」を挙げていたケースは4件，イメージ・マップ中に舞台を描きこんでいたケース（図❹－7，図❹－8）も4件で，双方ともに挙げている人は2件であった．なかでも若年グループ2名ともが舞台を「大切な場所」として挙げているのが目立つ．しかし，それは想いだけであって「年に1回」しか行かないのである．他方，老年グループは，村内のイメージ・マップを描いた3名とも「舞台」は記入されてあるが，アンケートとなると「他人に説明するとき」に2名が挙げるのみであって，好きな場所でも，大切な場所でもない．大切なのは「自宅と畑，林」に関心がいくのは，なんとしても現実の生活そのものがかかっているからであろう．しかし，舞台へ行く回数は，「月に2回くらい」が2名，「年に7回」「年に2回」が各1名で，若年グループより行く回数は増える．舞台に対する想いは，「先祖への感謝」を2名がはっきりと記し，観客席をコンクリート化したことに対して「先祖に申し訳ない」とし，歌舞伎そのものも「観光化して悲しい」と記す．

60歳以上の人びとは第二次大戦前から戦中を経験しており，まったく違った状況内で育ったのであるから，現在の変貌ぶりに自分たちが教えられ信じてきた価値観が貶められる思いがするのであろう．たしかに，歌舞伎も1000人を超す観客となり，村の総人口678名をはるかにオーバーしており，年に2回の例祭の他にもう1回，この時は入場料を徴収して上演している．かつては村人の生活のなかでの必然から演じられ，集まったものが，その必然は失せ，保存のために演じ，それが観光資源として収入と結びつくならありがたいこととなって，もはやその性格は一変してしまったのである．

とはいうものの，イメージ・マップまたはアンケートで「舞台」に触れている人は7名中6名あり，人びとの心のなかにはまだ大きな存在としてあることは確実であろう．それはさまざまな意味で，舞台の建つ境内が“場所”として人びとに作用しているからにほかならないからではないだろうか．



図❹－7　村民(21歳)によるイメージ・マップ(1998年)



図❹－8　村民(60歳代)によるイメージ・マップ(1998年)

末尾となったが，度重なる聞き取り調査や書面での質問に快く応じて下さった檜枝岐村教育長の星廣人氏その他御関係の方々には深く感謝します．

また，実測と作図の指導に渡部一二教授の力添えを，実際の実測と作図には本学卒業生の大塚亮一氏，木下周介氏，萩原卓氏の協力を得た．

なお，本研究は多摩美術大学共同研究費によるものである．

（執筆　山下　泉）

註

1．はじめに ―“場所”について

(1) 久武哲也「C.O.サウアーとBerkeley School―景観論をめぐって―」『人文地理』第29巻－第2号，1977，pp.110～112　や竹内啓一「主観の地理学からの逆照射―社会地理学の位相―」『一橋論叢』81巻6号，1979，pp.653～667，山野正彦「空間構造の人文主義的解読法―今日の人文地理学の視角―」『人文地理』第31巻第1号，1979，pp.46～68，久武哲也「バークレー学派の転回点と潮流―サウアーにおける『景観の形態学』をめぐって―」『甲南大学紀要』，文学編35，1979，pp.36～76，久武哲也「文化景観のランガージュ―バークレー学派の場合―」『甲南大学紀要』，文学編39，1980，pp.45～73，文学編43，1981，pp.29～79，等による．

(2) イー・フー・トゥアン『空間の経験』山本浩訳（筑摩書房1988）

(3) エドワード・レルフ『場所の現象学―没場所性を越えて―』高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳（筑摩書房1991）

(4) C・ノルベルグ＝シュルツ『ゲニウス・ロキ――建築の現象学をめざして』加藤邦男・田崎祐生訳（住まいの図書館出版局1994）

(5) J.D.Hunt, and P.Willis, eds., *The Genius of the Place, The English Landsccape Garden 1620-1820*, Paul Elek Ltd. 1975, p.124, p.196, p.212, p.222, p.268, p.342, p.361, p.365

(6) 鈴木博之「土地神」『都市住宅』（1979年1月号）pp.69～70，『建築の七つの力』（鹿島出版，1990），『東京の「地霊（ゲニウス・ロキ）」』（文芸春秋社，1990）

(7) 秋本吉郎校注『風土記』（日本古典文学大系新装版）（岩波書店，1993）p.55

2．自然の“場所” ― 聖なる場所

(1) 旧約聖書　出エジプト記　第三章第五節

(2) O・F・ボルノウ『人間と空間』大塚・池川・中村訳，（せりか書房，1979）p.136

(3) 湧上元雄・大城秀子『沖縄の聖地』（むぎ社，1997）による．以下の記述はこの著によるところが大きい．

(4) 註(3)p.39，p.152

(5) 沖縄で生まれ育った若い建築家，銘苅靖氏の談話による．

(6) 註(3)p.44，p.147

(7) 註(3)p.134

(8) 註(3)p.130

(9) 註(3)pp.132～133

(10) 註(3)p.130

(11) 前出の銘苅靖氏は，この島からはたとえ小石なりとも持ち出さないように，持ち出すと不幸が起るのは本当のようだから，と真剣に忠告してくれた．

3．歴史のなかの“場所”――活気・賑わいの場所

(1) 文永八年九月二十一日「四条金吾殿御消息」（『昭和定本日蓮聖人遺文第一巻』87）．

(2) 清田義英著『鎌倉の刑場』（敬文堂　1978年）．

(3) 『一遍聖絵』詞書．

(4) 『遊行上人縁起』詞書．

(5) 『寧楽遺文下巻』調庸綾絁布墨書補遺．

(6) 『藤沢市史第四巻』（藤沢市役所　1972年）．

(7) 児玉幸多編『藤沢』（藤沢市文書館　1983年）に，諏訪神社（上・下社）について，

> 祭神建御名方命・八坂刀売命，境内社伊勢山神社・祖霊社．創立養老七年（723），例祭日八月二十七日，信濃諏訪大社より他郷への最古の御分霊社として勧請された．弘仁三年（812）下社は宮畑より鯨骨湖畔に，上社は天長三年（826）に諏訪ヶ谷より浪合に移された．その後貞和三年（1347）に上下社，安永元年（1772）には上社，嘉永元年（1848）には下社が再建された．

と解説している．

(8) 『倭名類聚抄』（源順撰，承平年間成立）．

(9) 清田義英著『中世都市鎌倉のはずれの風景』（江ノ電沿線新聞社　1997年）．

(10) 「鯨骨」呼称の由来について，昔大津波に乗って境川をさかのぼった鯨が打ちあげられ，その鯨の骨を埋めたという鯨塚がかつてあったといわれる．そのため鯨骨と呼ばれ，小字名にもなっている．

(11) 江戸幕府官撰，天保十二年成立．

(12) 註(3)．

(13) 註(3)，註(9)参照．

(14) 註(3)．

(15) 松岡心平「踊り念仏の興行師」（武田佐知子編『一遍聖絵を読み解く』〈吉川弘文館　1999年〉所収）．

(16) 註(9)．

(17) 註(3)．

(18) 黒田日出男著『姿としぐさの中世史』（平凡社　1986年）．

(19) 註(18)．

(20) 北見俊夫著『市と行商の民俗』（岩崎美術社　1970年）．

(21) 網野善彦著『増補無縁・公界・楽』（平凡社　1987年），同『河原にできた中世の町』（岩波書店　1988年）．

(22) 註(21)．

(23) 『日本国語大辞典』（小学館　1975年）．

(24) 『相中留恩記略』（福原高峯撰，天保十年成立）などからもうかがえる．

(25) 註(9)．

(26) 註(2)．

(27) 註(2)，梵天塚は江の島道の「路傍にあり」（『新編相模国風土記稿』）と記録されているが，今日ではその場所は定かではない．

(28) 有岡利幸著『松と日本人』（人文書院　1993年）．

(29) 註(9)，清田義英「鎌倉のはずれの風景」（『多摩美術大学研究紀要』第4号）．

(30) 註(23)．

(31) 註(29)．

(32) 固瀬駅はときに固瀬宿（『吾妻鏡』建長四年四月一日の条）ともみえる．また，腰越駅（『吾妻鏡』元暦二年五月二十四日の条）の名もみえるが，この固瀬駅と腰越駅との関連については註(6)，註(9)参照．

(33) 註(2)，註(9)．

(34) 註(3)．

4．現在に生きる“場所” ― 娯しみ集う場所

(1) 景山正隆「檜枝岐と大桃の舞台と芸能―調査報告」『戸板女子短期大学研究年報』第16号1973，p.5

(2) 星知次編『会津郡長江庄檜枝岐村耕古録』（檜枝岐村1978）p.42

(3) 檜枝岐村編「檜枝岐村史」（檜枝岐村1970）p.449

(4) 註(3)p.449

(5) 註(1)p.5

(6) 景山正隆「農村舞台探訪」（角田一郎編『農村舞台探訪』和泉書院，1994）p.11

(7) 福島県立博物館編『企画展　村芝居の世界』（福島県立博物館1995）p.11

(8) 註(3)p.353

(9) 註(3)p.353

(10) 註(3)p.353

(11) 註(3)p.211

(12) 以前はこの仕掛けはなく，舞台を後退する以前の古い写真(竹内芳太郎『野の舞台』ドメス出版1981，p.146)では，木の枝を並べて荒い柴垣のようにして花道の背板としている様がみられる．